２０２０年１２月１４日（月）

老球の細道５８１号

見る、見る〈ミニバス地区大会、高校新人地区大会観戦雑感〉

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

未だに解決しない日本学術会議問題で浮上し、今年の流行語大賞でも有力候補であった「総合的・俯瞰的」という視点が話題になっている。物事を判断する時、正当な根拠がなく、対外的に適切な説明ができない時や柔軟に対応する時などに使われる視点である。

総合的、俯瞰的な視点は全体的に物事をとらえる場合は必要であるが、具体的に状況判断をする場合はそれだけでは事足りない。私は四つの視点「四つの目」を原則としている。一つは「鳥の目」。鳥目とは違う。俯瞰的な視点とダブるかもしれないが、高いところから全体を見渡すことである。二つは「虫の目」。細かいところに目を配ること。三つは「魚の目」。世の中の潮流を感じとること。そして最後に「恐竜の目」、別名「歴史の目」である。前例はあるのか、今後どのように進むのか。

バスケットボールの試合を観戦する時も、どのような視点で見ているかによってゲームの見方がまるで違ったものになる。あるコーチは「ゲームの戦術」、またあるコーチは「ファンダメンタルの出来不出来」、またまたあるコーチは「タレントの有無」など色々である。どこを、どのように見ているかでゲーム結果の判断、今後の対策などは違ってくるだろう。

最近２つのバスケットボール地区大会を観戦した。ミニの地区大会、高校新人地区大会である。両大会ともターンオーバーが非常に多かった。その原因を総合的、俯瞰的に判断すると「状況判断」が適切にできていないことだと思う。世界のバスケットボールは状況判断を重視する。そのために、ドリルも機械的にするのではなく、状況判断を要するドリルが流行している。しかし当地区ではまだまだ浸透していないのではないだろうか。

状況判断とは、まず「見る」ことから始まる。どこを見るか、何を見るか、どのようにして見るか等で判断も違ってくる。見ることは一時に一ヶ所しか見れないために優先順位が必要となる。特にバスケットボールは見なければいけないものが多いから重要である。

ゲーム中のミスの多くはボールマンの状況判断の未熟さである。見るべきところを見ないで自分勝手に判断してプレイする。見るためにはきちんとストップしなければならないが、動きの惰性でパスをしたり、ドリブルをしたり、シュートをすることを是としている。レシーブしてすぐにプレイする場合はレシーブする前にしっかり見なければならない。

ミスの多いチームはボールマンの「見る」ことを虫の目でチェックしてほしい。ここを虫（無視）してはいけない。ボールマンはボールを持ったら第一に「ゴールを見る」。味方ではない。第二に「自分のデイフェンス」、第三に「味方のデイフェンス」である。ゴールを見ることは、オフェンスにとって大切な場所、人がすべて見える。デイフェンスを見ることは、オフェンスのやるべきプレイをデイフェンスがすべて教えてくれる。

ボールをキャッチしたら見る、パスをする前に見る、ドリブルする前に見る、見る、見る。そのような地道な手続きを繰り返すことでミスは減少し、オフェンスはみるみる上達する。